

# 陶町歴史ロマン 18



## 13、道路以外のインフラ整備

### (1)通信網の整備

明治5年(1872年)官営の郵便制度が制度化され、この地方では土岐郡高山村に郵便取扱所が開設されました。

明治23年(1890年)には猿爪郵便局が開設されています。また、明治38年(1905年)には水上簡易郵便局が開設され、明治42年(1909年)に猿爪郵便局は陶郵便局に改称されています。

明治40年に猿爪郵便局は電信電話事務開設を申請しているが、その際に「事務開設に伴う経費は全て地元負担すること可能です。」とのコメントを付けています。とても元気(景気)のいい村だったかがうかがい知れます。この申請は明治45年に認められました。開通時の陶局の電話番号は12番までだったそうです。そして、翌年には公衆電話が郵便局に設置されました。

今では当たり前で日常生活で使用する電話ですが、当時の人にとっては、受話器を耳に当てると遠くの人話し声が聞こえることは、とってとても不思議なことであつたでしょう。この不思議体験を陶の人は近隣の人より早く体験することができたのでした。

### (2)電気事業

大正2年(1903年)には陶村から送電工事の申請がなされ、そして瑞浪市内では一番早く大正5年に役場に電燈が灯りました。瑞浪市街地で電燈が灯ったのは大正9年ですから、それよりも4年も早く電燈が灯ったこととなります。前記の電信電話事務開設といい、いかに陶に力(金)があつたかが伺われます。もっともこの頃の電力供給は安定していませんから、停電はしょっちゅうで、一度停電すると復旧までには相当時間を要していたようですが…。

大正10年の曾根かまさんの日記によると

8月13日 夜、電気が来ない。自分は夜の7時に寝る。

8月31日 今日は活動写真がある。娘を連れて観に行く。夜10時に帰る。

(活動写真にも電気がいるし、夜には照明がいる)

10月2日 今日は寿座で芝居がある。木戸銭(料金)は1円のところ半額の50銭。

寿座では初めての芝居であつたが面白かつた。夜の11時に帰る。

(芝居には照明がいる)

(注)寿座とは、猿爪の元町にあつた食堂「魚金」の隣にあつた芝居小屋で

私は子供のころ、ここを「舞台」と言っていました。

観客席を升目に区切つた舞台があつた記憶があります。

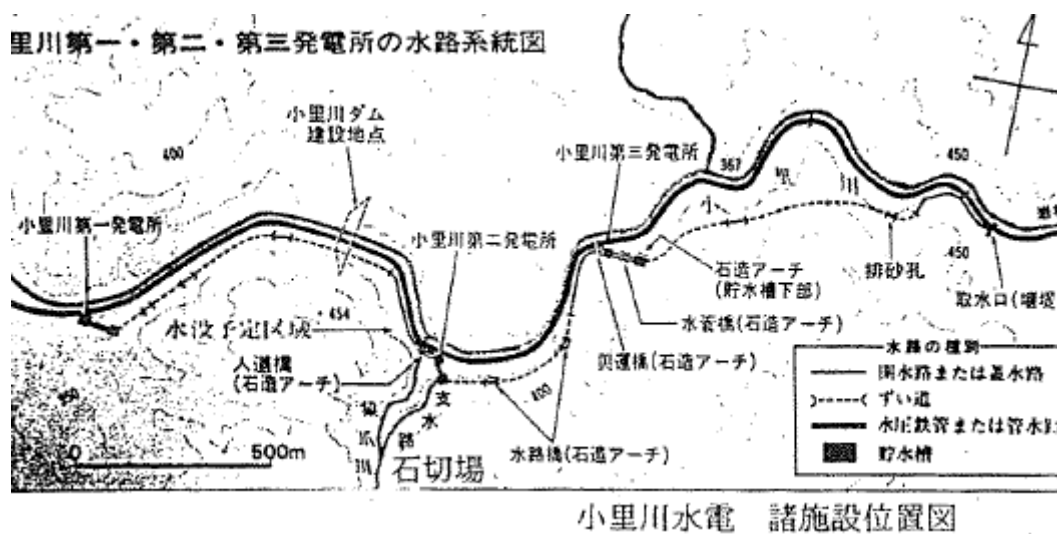
と、あります。

この新しいものを取り入れる先取りの精神が、その後の窯業の発展につながったことは間違いありません。実際、電気はその後の窯業の省力化に大いに役立ちました。

### ○小里川 川折発電所

川折の発電所は多治見電燈所第 3 発電所として多治見電燈所の加藤乙三郎が、自己の持つ土木技術を駆使して建設した発電所である。

「加藤乙三郎」聞いたような名前だと思って調べてみると、戦後の高度成長期に中部電力会長、中部経団連の会長もしているのが加藤乙三郎である。中電の乙三郎は乙三郎 2 代目で多治見電燈創立者の加藤乙三郎（初代）の子で襲名前の名は輝三郎であった。



この発電所は 3 つの小規模水路式発電所からなり、下流から第 1、第 2、第 3 と名付けられていた。この地域の地場産業の発展、地域社会の近代化に大いに貢献したことは間違いありません。

この 3 つの発電所を、通称「川折の発電所」と呼ぶが、そのある位置は、最下流の第 1 発電所こそ稲津町の川折であるが、その上流の第 2・第 3 は瑞浪市陶町水上である。この辺りの左岸は陶町、右岸は山岡町田代で、発電所は左岸にあったから陶町水上である。実際、私の同級生には、親が川折の発電所の管理人で、そこに住んでいたのが毎日小滝道を通って陶中学校に通っていた子がいました。冬の下校時は真っ暗な山道で大変だったと思います。

この発電所のうち完成したのは第 2 発電所が最も早く大正 7 年（1918 年）に完成し、出力は 130kw であった。続いて最下流の第 1 発電所が大正 11 年に完成（出力 150kw）、最上流の第 3 発電所が最も遅く大正 14 年に完成（出力 180kw）した。

現在の小里川ダムの発電量は、1,800Kw で一般家庭 600 世帯分というから、現在の猿爪分も賅えないこととなります。昔の川折の発電所は 3 つの出力を合わせても 460kw にしかありません。これは、昔の電気使用量がいかに少なかったか、現在がいかに電気に依存し

た社会かを物語っています。

<現在の川折発電所を散策>

現在の川折発電所のうち、第2・第3は小里川ダムに水没し、最下流の第1発電所のみ現存しています。但し、ダムの完成と共にその役目を終え稼働はしていません。



建屋の基礎部分に  
多治見電燈 第三発電所の表札

最下流の第1発電所の現在(県道20号線から見えます)

小里川下流から右に上記写真の第1発電所を見ながら上流方向に上ると、堤高 114mを誇る小里川ダムを下から望むことができます。

小里川ダムは平成 15 年に完成した洪水調節・環境維持・発電などを目的にした近代ダムであると同時に川折の発電所の息吹も感じさせる多目的ダムである。

ダムの管理事務所を訪れると、塚田邦彦さんによる絵画「雪の発電所」が展示してあった。



塚田邦彦さんによる川折発電所の絵画(小里川ダム事務所に展示されている)

塚田さんは釜戸町出身の画家で御嶽の山々などの美しい風景画家として知られ、愛知県美術館などで個展を開いている。その塚田さんの大作が小里川ダムに寄贈され展示されているのである。

写真中央の第 2 発電所が水上の樋の下から下った（小滝街道）ところにあった。私にとっても懐かしい風景の絵画で感動を覚えた。

ダムに沈んだ発電所には上記の絵画にも描かれている「輿運橋（ようんばし）」と言われていた国内でも珍しい石造のアーチ橋がかけられていた。地元産の花崗岩を使用し、建造から約 100 年、大きな改造もなく耐えてきた誇るべき石造構造物である。

この橋は多治見電燈発電所にとって川折の発電所が四番目の発電所であることから四運橋、四は縁起が悪いからと輿運橋と名付けられたと言われていています。その形から通称「めがね橋」とも呼ばれていました。

ダムより更に上流に上り、川を渡ると原石山と呼ばれる広場がある。更に陶側に行くと発電のために水を流した水路跡を見ることができる。これもレンガ造りの立派な産業遺産である。

また、ダム上流には、発電所への水の取水口を見ることができる。これもまた、頑丈な石造の堰である。



道の駅「おばあちゃん市」移設された輿運橋



もうひとつ、沈んでしまった遺産として田代大滝を忘れてはいけません。その昔、その大滝の不動尊に陶の人と山岡の人が合同で雨乞い神事をしたという場所である。



発電用の水路跡



田代大滝

### (3)水上市場平の灌漑用水



水上市場平は、丘の頂上辺りにあって水がなく、わずかな沼田と桑畑ばかりの農地であったが、何とかして米作地にしようというのが市場平区民の長い間の願いであった。

しかし、どこから水を引いてきたらよいかが大きな悩みの種であった。

土地の識者 小木曾岩造氏の呼びかけにより小木曾太郎兵衛氏、加藤新左衛門氏外数名が世話役となり、小木曾岩造氏が設計・監督することとなったが、この工事には極めて優秀な作業が必要であるとの観点から八方鋭意手を尽くして探したところ、隣の曾木村に加藤亀三郎という優秀な作業者がいることを探し当てた。この方は、通称「土管亀さ」といい素晴らしい技術と設計の妙を得た人で、今までにも難事業を解決、成功させていた。この方にこの難工事を引き受けてもらおうと誠心誠意を尽くして懇願したところ「私としては一代を通じての難工事であるが、皆さんの誠意に喜んでお引き受けいたします。」と、快く受諾していただき、この難工事が始まったのは明治9年5月であった。

当時は、現在のようなトランシットや水平測量機、巻尺などはなく、作業はもっぱら夜間にローソクの火を頼りに行われた。

- ・照明 … ローソク、線香
- ・水平器 … 割竹に水を盛った測量器
- ・距離を測る間竿 等を用い、位置、高低、距離、落差を調査し、地図上に簡易な流水図を記録した。

それを基に小木曾岩造氏を監督に、手掘りの作業を区民の区役により1年3ヶ月の歳月を経て用水路が完成した。

直線なら1kmほどの距離だが、少しばかりの勾配を持たせた曲がりくねった水路は想像もつかない山の中を通り延長6Kmにも及ぶという。現在、水路をたどってみると「こんなところ……よくやったものだ。」とびっくりするのは私だけではないと思う。

水路の途中に隧道（掘り下げた道）が2か所あり、落盤が多くて使用に堪えず曲折して水路を作ったりした。

私たちの記憶にある国道を横切る高架の水路（右の写真）は、最初は地下水道の土管水道でその落差によって市場平へ昇水させていたが、水圧で破損が激しいため高架で通すことにしたものである。当初は水を通すと雨降りのような水漏れで、その下を通る人たちを困らせたといえます。しかし高架の水路は大変珍しく「樋の下」という地名まで



できました。国道363号線の改修に伴い昭和50年立派な樋が完成したが、やはり水漏れ等があり現在は、昔の樋の位置より少し西の地中を通して国道を横断している。

#### <現在の市場平用水を散策>

- ① 陶町猿爪下山の猿爪川にかかる平沢橋の少し上流に取水口があります。
- ② 国道363号と並行して南下し、陶小学校裏へ。
- ③ 陶小学校裏より地下に潜って県道を横断します。



- ④ 学校前の竹藪の中・山の中をちょっとした勾配を作って栃ノ入り方向へ



- ⑤ 山中を抜けると栃ノ入り山里をほぼ水平に



⑥ 再び山中 藪の中を通過して浜岩場へ



⑦ 現在の水路はここで再び地下にもぐりますが、昔は不動庵の隣を抜けて国道を渡る樋へ延びていました。





- ⑧ 国道を地下で渡った水路は再び地上に出て、水上日向（ひよも）の各家の間を縫うようにして市場平の水田地帯へ



- ⑨ 用水により潤う市場平の水田

